

Title	[書評] 桐島薫子著「晩唐詩人考：李商隱・溫庭筠・杜牧の比較と考察」
Author(s)	愛甲, 弘志
Citation	中國文學報 (1999), 59: 176-184
Issue Date	1999-10
URL	http://dx.doi.org/10.14989/177840
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

書 評

桐島薰子著『晚唐詩人考——李商隱・溫庭筠・杜牧の比較と考察——』

（中國書店、一九九八年、二四八頁）

そもそも我が國に限らず、中國でも晚唐文學の專著はいえは寥々たるものである。晚唐という時代が、歴史的事實として唐王朝の衰退期に在り、そしてそれが文學に反映されているであろうことは當然のこととして受け止められよう。しかしながらこの晚唐文學を具體的にどのように理解し、評價するかということになると、この王朝が衰退期に在ったという歴史的事實が研究者たちを惑わしてきたことも、また歴史的事實である。つまり晚唐は晩唐に過ぎず、盛唐や中唐の餘燼でしかないという意識が拭いきれていないのであり、よって晚唐文學が確かに盛唐・中唐から繋がって來るものであり、そして宋代文學へと伸びていくも

のとして語られることは少ない。これは中唐文學研究にとつても、また宋代文學研究にとつても残念なことである。

ここに紹介する桐島氏の著書は久々に晚唐文學の專著として上梓されたものであり、しかも副題に「李商隱・溫庭筠・杜牧の比較と考察」とあるように、この時代を代表する詩人を纏めて扱うという意欲をもつて書かれたものである。そして目次から見取れるように、これら三人の詩人を比較する爲に成された工夫によつて、三者の違いが明快に論じられている。但だ時に補足が必要であつたり、また立論に於いて別の方向も有り得るのではないかと思われる所がある。以下、それらについて述べさせてもらいたい。本書には最後に附論として「唐代の新孟光考」が加えられているが、ここでは取り扱わないこととする。附論を除いた目次を記すと次の通りである。

まえがき

第一章 政局と詩人

小序

第一節 混亂の政局―牛李の黨争―

第二節 李商隱 自己否定と運命の受容

第三節 溫庭筠 自己解放と忌憚無き行爲に見る外向性

第四節 杜牧 官界の人脈と自己實現への執着に見る社會

性

まとめ

第二章 李商隱と杜牧

小序

第一節 妓女を詠んだ作品

(1) 李商隱 妓女の悲哀の情を付度した詠出法

(2) 溫庭筠 妓女の悲劇性を華麗化した詠出法

第二節 女道士についての作品

(1) 唐代女道士考

(2) 李商隱 女道士の境遇と心情を主題とした表現

(3) 溫庭筠 女道士の美しさを客觀的に描寫した表現

第三節 戀愛を詠んだ作品

(1) 李商隱 絶望的戀愛の受容

書評

(2) 溫庭筠 戀愛の耽美的な一場面としての描寫

まとめ

第三章 李商隱と杜牧―兩者に於ける女性の捉え方・戀愛

觀と憂國意識の相違―

小序

第一節 女性の捉え方と戀愛觀(艶なる世界)

(1) 李商隱 自己の寄託と戀愛世界への偏重

(2) 杜牧 客觀的視線と戀愛世界の一時性

第二節 憂國意識(豪なる世界)

(1) 李商隱 憂國意識とその限界

(2) 杜牧 憂國意識の徹底

まとめ

第四章 李商隱 意識の私的世界への凝集

―悼亡詩を中心に―

小序

第一節 李商隱の結婚

第二節 李商隱の悼亡詩―妻の幻想化・理想化―

第三節 李商隱の悼亡詩―自己の現實に對する焦燥の顯

現—

第四節 李商隱の悼亡詩—自己の虚脱・孤獨・絶望の滲

出—

まとめ

おわりに

李商隱・溫庭筠・杜牧の比較と考察と一口に言っても、そこには焦點が定まっていなければならないが、それはこの目次から明白に見て取れる。つまり本書は李商隱を論じることと在るのであり、溫庭筠や杜牧は李商隱を際立たせるための道具立てとして扱われている。これを確認したところで、本書を讀んでいくと、「まえがき」の中で〈李商隱・溫庭筠・杜牧を圍繞する政治的社會的情勢・彼らにつながる個人的な人間關係や家庭環境など、いわば三者の創作活動を宿命的に方向づけた客觀的要因の共通點と相違點を比較檢證し、かかる客觀的要因に多かれ少なかれ妥協しながらも三者三様にこれに對應した言行・心情などから彼らに内在するそれぞれの個性的要因を探り出すことを試みた〉(第二頁)と述べている。〈客觀的要因〉及び〈個性的

要因〉が本書に於けるキーワードであるが、それを主に政治的社會的情勢との關わりの中で結ぼうとするからには、「政局と詩人」を第一章に置くことの意味は大きく、ここにかんがりの紙面を費やすのも、著者の考え方からすれば、當然のことである。人は社會の中で生きていけば、その社會の影響を受けることから免れない。特に貢舉を目指し、士大夫たらんとした三人が當時の政局(著者は牛李の黨爭を中心据えている)と無關係であらうはずはない。もともと牛李の黨爭について、本書でその歴史を概観してはいるが、渡邊孝氏は「牛李の黨爭研究の現狀と展望—牛李黨爭研究序説—」(一九九四年『史鏡』第二十九號 日出學園中高部)の中で、この黨爭についての研究史と問題點とを整理している。そこから知り得ることは、牛李の黨爭について未だ決着していない問題がどれほど多いかということである。渡邊氏はその黨派の規模についても〈黨爭は、巨大なピラミッド型黨派間の激突というよりも、朝廷中樞のトップ・レベルに近い一群の官人間の死闘であつたと見た方が、實狀に近いように思われる〉と述べており、これは

これまで文學史に紹介されるものとは随分異なっており、我々は史學の成果に絶えず注意していなければならないだろう。また李商隱と令狐綯との確執についても、この黨争を抜きには考えられないが、その始まりについても、從來は相對する李黨の王茂元の娘と結婚した開成三年（八三八）とされているが、傅璇琮氏の「李商隱研究中的一些問題」（『文學評論』一九八二年第三期）を承けた周建國氏の「試論李商隱與牛李黨争」（一九八四年『文學評論叢刊』第十二輯）は更に一步踏み込んで、そこを起點とするのは否定しないが、大中元年（八四七）に桂管觀察使の鄭亞に従ったことが決定的な要因であることを説得力を以て論じている。これに従えば李商隱と令狐綯との長い歴史には自ずと濃淡が有るはずである。とはいえ以上のことは、桐島氏が「まとめ」の中で（李商隱の方は葛藤・絶望を自己の中で凝縮させる内向性を、一方、溫庭筠は不満・失望を大膽に外へ發散し一種の活力とする外向的個性を有していた。次に、この両者が生涯を費やして手裏に收めようとした後楯や人脈を生來得やすい立場にあった杜牧は、言動に自己

矛盾を包含しつつも世業への誇りと經國の志を堅持するという社會的個性を有していた」（第五五頁）と結論付けることに大きな影響を與えるものではなく、この結論自体も概ね妥當なものである。しかしながらこれを敷衍して（政局で見せた三人の個性がどのように各作品に投影されているかを把握することが、李商隱、溫庭筠、杜牧が大詩人と稱されるようになった獨自の文學世界の創作過程を明らかにする方法であると考えられるのである）（同頁）と述べることには不安を覺える。確かに、このような方法論は董乃斌氏の『李商隱的心靈世界』（一九九二年 上海古籍出版社）にも詩人研究に於て必要なものと詳しく論じられてはいるが、また同書から（獨自の文學世界の創作課程）を（客觀的要因）である政治的社會的情勢との関わりだけから看取った（個性）で明らかにすることに自ずから限界が有ることも理解されるはずである。

第二章以下は戀愛詩についての論考になるが、前述の如く、主となるのは李商隱である。李商隱の戀愛詩はそれが

特異なるが故に、研究者の關心を惹き付けてきた。例えば我が國では、本書も引用する川合康三氏の「李商隱の戀愛詩」(一九七四年 京都大學『中國文學報』第二十四冊)は李商隱の戀愛詩が「知的精神」が「現實と非現實との間にたゆとう」(朦朧とした雰圍氣)を作り出すことを論じ、また詹滿江氏の「李義山戀愛詩試論—士大夫文學における位相—」(一九九一年『杏林大學外國語學部紀要』第三號)は李商隱にまで迫り着く戀愛詩の歴史を述べており、更に遡れば山之内正彦氏の「李商隱詩表現考・斷章—艶詩を中心として—」(一九六九年 東京大學東洋文化研究所『東洋文化研究紀要』第四十八冊)はその艶詩を中心とした、詩の構造・發想・イメージの特質を詳細に分析するが、この論考は未だにその價值を失っていない。そしてこれより更に遡つて高橋和巳氏に『詩人の運命—李商隱詩論—』(一九七二年 河出書房新社 高橋和巳作品集別卷 後に『高橋和巳全集』第十六卷所收 一九八〇年 河出書房新社)があり、これ以後の李商隱研究は、高橋氏をどれだけ越えるか、或いはいかに高橋氏と異なる新機軸を打ち出すかによって、その研究の價值

を計ることができると言つても過言ではなからう。本書では何故か高橋氏と山之内氏の著作を掲げていないようであるが、例えば「第一節 妓女を詠んだ作品」(一)李商隱妓女の悲哀の情を付度した詠出法」で「このように、李商隱が妓女を詠む時は彼女たちの表面的美しさや不幸を客觀的に描寫していくのではなく、彼女たちの置かれた立場を、自己の經驗を踏まえて、理解し、同情した上で、彼女たちの心情を推し量つていこうとする態度が見える」(第六七頁)と結論付けるのは、高橋氏の『詩人の運命』執筆の基礎となつた『李商隱』(一九五八年 岩波書店 後に『高橋和巳全集』第十六卷所收 一九八〇年 河出書房新社)の序文に「歌を聞く」(二九ページ)の詩に典型的に見られるように、權力者の庇護によつてしか生きられぬ女官、仕える人の死にあえば歸つて行くところのない側女の嘆きを、彼が繰返し歌う根據の一つは多分このあたりにある」との示唆があり、大いに參考となり得たはずである。

「第二節 女道士についての作品」(二)李商隱 女道

士の境遇と心情を主題とした表現」は〈李商隱が女道士を描く場合、彼女たちが今までの生活を離れ、道觀で、隔絶されて暮らすという無情な境遇とその心情を主題として述べた作品が目立っている〉と結論付けるが、李商隱が若い頃、道觀で學んだこと、そして宋という女道士と成就することのなかった戀愛に落ちたとも言われることが、李商隱

の文學、例えば朦朧とした詩境を開拓したこと、詩語に日常的な物を用いることを避けている等といったものに多大な影響を與えておれば、ここはより深い意味を提示しなければならず、次の「(2) 溫庭筠 妓女の悲劇性を華麗化した詠出法」と同列に扱えないのではないだろうか。また次の「第三節 戀愛を詠んだ作品」「(1) 李商隱 絶望的戀愛の受容」の中で著者が〈實らぬ戀愛〉と述べているのは、これも女道士との戀愛も含まれているようで、前節と區別してあるのは、溫庭筠との比較を優先させるためにこのようになったのであろうか。李商隱と道觀及び女道士については鍾來茵氏が「唐朝道教與李商隱的愛情詩」(原載『文學遺產』一九八五年第三期 後に『李商隱研究論集』に轉載 一九

九八年 廣西師範大學出版社)で過去の成果を踏まえ、『道藏』を活用した劃期的な檢證をしており、最近上梓された『李商隱愛情詩解』(一九九七年 學林出版社)はその集大成として大いに參考になろう。

「第三章 李商隱と杜牧——兩者に於ける女性の捉え方・戀愛觀と憂國意識の相違——」は〈艶なる世界〉と〈豪なる世界〉を比較するという切り口で、兩詩人の違いを浮き彫りにしている。桐島氏は〈艶なる世界〉は女性に、〈豪なる世界〉は憂國意識に關わらせて、〈李商隱にとっては「艶」なる世界が「豪」なる世界より、彼の中で大きな比重を占めており、一方、杜牧にとっては、「豪」なる世界が「艶」なる世界をはるかに凌ぐ重要性を有していた。この相違は二人の内在する個性をそれぞれに反映したものであるといえよう〉(第一四一頁)とまとめる。これは「第一章 政局と詩人」と大きく關わっている。そもそも本書に於けるキーワードの一つは〈個性〉であったが、著者はその〈個性〉を政治・家庭環境等との關わりの中で看取って

いた。この〈個性〉を性格と言ひ換えないのであれば、そしてまた本書の最終目的が詩人の〈獨自の文學世界の創作過程を明らかにする〉ことであれば、この〈個性〉を育んだものに、時代の文學をも含めた、あらゆる客觀的要因も加味すれば、詩人としての〈個性〉の實質がより明確になるのではないだろうか。著者のいう〈艶なる世界〉と〈豪なる世界〉は別の言葉を借りれば、私と公に置き換えられるが、詩とは志を言うもの、という儒教の理念に支えられたこの文學觀は、いつの時代に於いても決して覆すことのできないものであり、憂國の情を表明することは士大夫たらんとする者にとって當然のことである。これが公である問題は私の方であり、私という世界が獲得されていなければ李商隱は〈艶なる世界〉へと向かうことはできなかったはずである。この私の世界の獲得の爲に晩唐に先立つ中唐の詩人たちは模索していたのである。例えば川合康三氏は「白居易閑適詩攷」（一九九一年『未名』第九號 後に『終南山の變谷』に轉載 一九九九年 研文出版）で〈現實が幸福に満たされていたのではなく、現實の中から幸福を掬い

取つたのである〉と述べ、白居易の閑適詩そのものが政治の桎梏から解放されていったことを論じている。また著者も引用する中原健二氏の「詩人と妻——中唐士大夫意識の一斷面」（一九九三年 京都大學『中國文學報』第四十七冊）でも〈中唐の士大夫たちは、個人としての生活やそこから生じる私的な感情を、價値の劣るものとは見做さなくなつたのである。私的な生活や感情も、やはりかれらの世界の一部であり、それは官僚としての公的な世界に對置し得るものなのであつた〉と論じている。韓愈が奇怪なまでに言葉を捏ね上げて新しい詩を造り、獨自の古文を綴つたのも、新しい價値觀を發見するという精神に於いて、通ずるものがある。この時代に於ける既成の價値觀の搖らぎと新しい價値觀の發見は、文學の世界に止まるものではなく、副島一郎氏の「中唐における儒學の演變とその背景」（一九九七年『集刊東洋學』第七七號）は思想界に於いても同様のことが有つたことを明快に論じている。李商隱の〈艶なる世界〉が李賀の影響にあるというのも、このような大きな流れの中に入つてしまふのである。詩人の〈獨自の文學世

界」について詳しく論じるならば、李商隱・溫庭筠・杜牧の比較だけでは説明し盡くすことはできないのではないだろうか。もともと〈憂國意識〉についても、戀愛を詠うものは事象として捉え得るが、憂國意識とはあくまでも意識であり、それを正しく把握するのは難しい。本書で李商隱が開成二年（八三七）に作った「行次西郊作一百韻」詩を全文引用し、〈この詩には憂國の士としての意識がよく現れている〉（第一三二頁）とだけ述べるが、この詩から評者が連想するのは、寶曆の驕奢ぶりを秦の始皇帝に託したという杜牧の「阿房宮賦」であり、これも李商隱と同様に貢舉及第前という若い時に作られたことを考えると、この詩の存在自體に據りかかるのではなく、具體的に詩句を分析することによって、彼の〈憂國意識〉を論じる必要があるう。

「第四章 李商隱 意識の私的世界への凝集―悼亡詩を中心に―」は「第二節 李商隱の悼亡詩―妻の幻想化・理想化―」で李商隱の妻、王氏の爲の悼亡詩が取り上げられ、

潘岳以降、近くは元稹のそれとの比較を行っている。悼亡詩の歴史については、前掲の中原氏の論文が中唐までをカバーしており、また元稹との比較に於いても川合氏の「李商隱の愛情詩」に指摘があり、本節は概ねそれらを整理した形になっていると言えるが、これは「第三節 李商隱の悼亡詩―自己の現實に對する焦燥の顯現―」及び「第四節 李商隱の悼亡詩―自己の虚脱・孤獨・絶望の滲出」の論旨を鮮明にさせる爲に不可欠なものである。つまり第二節では詠まれる對象に焦點が當てられているのに對して、第三節及び第四節ではそれを詠む作者自身に焦點が轉じられるからである。これによって〈貴人の娘婿としての名聲と誇りを完全に失ひ、政黨間の鬭争に翻弄される情況下で致命的打撃を受けた。このため彼は、妻の死を單に感情的に悲しむだけでなく、もう一方で自らのこうした嚴しい現實を覺めた目で見つめ、その焦りや悔しさ〉（第一七六頁）や、〈妻の死という不幸を重く抱え込み、出世を願う霸氣を失ひ、孤獨と絶望の中で落魄した生涯〉（第一七七頁）が李商隱に悼亡詩を作らせ、また〈妻の虚像を一つの心の據り

所》（第一七六頁）とせざるを得なかったことがよく理解でき、他の詩人とは異なる悼亡詩が鮮明に浮かび上がってくる。

晩唐文學研究の寥々たることは冒頭に述べた通りだが、但だ李商隱だけは例外であり、まさに甲論乙駁といった盛況ぶりである。しかしこれも中國に在つての話であるが、そこには全く新しい方法を以て李商隱の詩を説明するものも出てきている。これは李商隱研究が批判的に積み重ねられてきた結果なのであり、評者がここに思いつきに等しい考えを付し得たのも、桐島氏の著書が有ればこそである。

（京都女子大學 愛甲弘志）